



小学校・中学校・高校の
先生のために



農村ホームステイ のすすめ



農業・農村ふれあいネットワーク

はじめに～学校の先生へ

大きな社会問題である不登校・引きこもり・ニートの原因は自立意欲を欠落させる「生活習慣の乱れ」・「希薄な対人関係」・「直接体験の不足」にあると言われています。そんな中、国はそれらを補う活動として、農山漁村での自然体験・生活体験が「生きる力を育む」有効的な手段として重要視するようになっていきます。(文部科学省「中央教育審議会生涯学習分科会」/H19.9.12議事録より抜粋)

そして現在は土や動物に触れることや農林漁業の作業等の機会が少なく、外食・中食の普及等による食の多様化により、家庭で食事をつくる機会も減少しており、子どもたちと食・農林漁業との距離が生まれてしまっています。そうした観点から国は、食料・農業・農村施策の一環としても食育や農林漁業の体験学習を位置づけ、推進しております。(農林水産省「食料・農業・農村基本計画」/H17.3)

また働くことへの意欲に乏しく、職場の人間関係に適応できない青少年も増加している中で、農林漁家での生活体験は働くことの意義、達成感、苦労を共感できる機会にもなっています。そのような社会背景を受け、上記の課題を解決させる有効的な手段のひとつとして近年道内で活動が拡がりつつある「農村ホームステイ」や北海道農協青年部協議会が平成25年度から始めた教員に対する農村ホームステイ事業の事例を道内の学校の先生に向けてご紹介するために作成しました。

北海道農協青年部協議会とは？

北海道の農業の次代を担う、20代・30代を中心とした若い農業者の組織です。

全道に広がる109の農協青年部(総部員数約7,500名)で構成されています。

小学校・中学校・高校の先生のために

農村ホームステイのすすめ

contents

- 02 はじめに ～学校の先生へ
- 04 先生のための農村ホームステイ
- 05 農村ホームステイを終えて…先生からの感想
- 08 先生のための農村ホームステイ～体験事例
- 10 農村ホームステイ体験の授業での実践
- 12 先生のための農村ホームステイ～1日の流れ
- 13 農と学びの連携を考えるフォーラム 2015
- 16 児童生徒のための農村ホームステイ
- 17 農村ホームステイを終えて…児童生徒からの感想
- 18 児童生徒のための農村ホームステイ～事例その①
- 20 児童生徒のための農村ホームステイ～事例その②
- 23 道内の小学校・中学校・高校の先生方へ



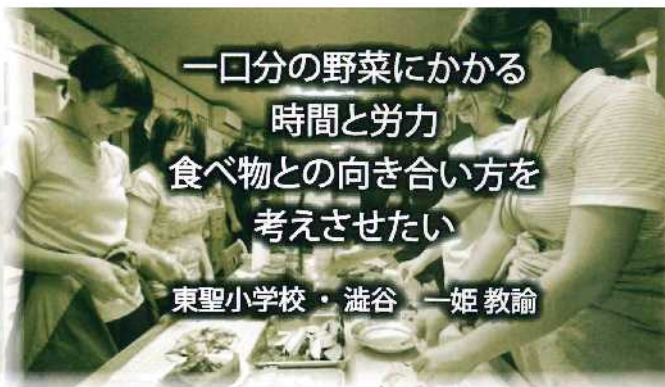


「農と学びの絆」
をつむぎ、
「学校と地域の協働」
を生み出す

先生のための 農村ホームステイ

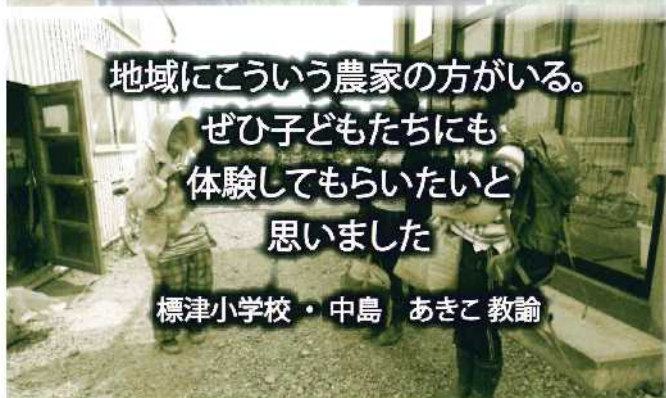
「農村ホームステイ」は、道内外の児童生徒たちにたくさんの学びと気づき、ふれあいの機会、感動をあたえ始めています。子どもたちだけでなく学校の先生からも体験してみたいという声もある中「教員と農業者の更なる連携をすすめていきたい！」「学校の先生にもぜひ体験してほしい！」という生産者の思いもあります。

次のページからは、そんな想いをかたちにした北海道農協青年部協議会の活動、そして実際に参加された先生方の声などを紹介いたします。



一口分の野菜にかかる
時間と労力
食べ物との向き合い方を
考えさせたい

東聖小学校・澁谷 一姫 教諭

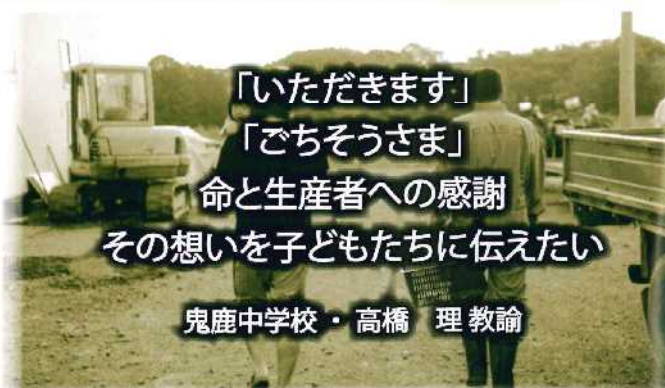


地域にこういう農家の方がいる。
ぜひ子どもたちにも
体験してもらいたいと
思いました

標津小学校・中島 あきこ 教諭

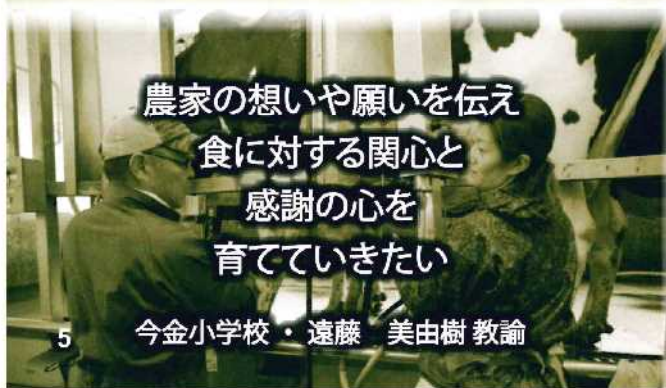


農村ホームステイを体験した 先生たちの感想



「いただきます」
「ごちそうさま」
命と生産者への感謝
その想いを子どもたちに伝えたい

鬼鹿中学校・高橋 理 教諭



農家の想いや願いを伝え
食に対する関心と
感謝の心を
育てていきたい

今金小学校・遠藤 美由樹 教諭



先生だって
体験したい！

先生のための農村ホームステイ 「食の大切さを伝えるプロジェクト」

北海道農協青年部協議会は、教員との更なる連携を模索するため、地域での教員と農業者のつながりを活かし、2013年から道内各地で農村ホームステイ事業「食の大切さを伝えるプロジェクト」を実施しています。

その内容は、地域のJA青年部員が教員に対し、農家宅での1泊2日のありのままの生活体験（農村ホームステイ）の場を提供し、様々な体験・ふれあいを軸に、教員と農業者と一緒に子どもたちに「食や地域の大切さ」を伝えることを考えていくというものです。

道内12地区で実施

- ①道南 ②後志 ③日胆 ④石狩 ⑤空知 ⑥留萌
⑦上川 ⑧宗谷 ⑨オホーツク ⑩十勝 ⑪釧路 ⑫根室



教える前に
体験しなきゃ！

1泊2日 農村ホームステイの流れ

～洞爺湖町立虻田小学校・糸川先生の体験～

1日目

受入農家・白石さんと対面



農業資材の積み降ろし
じゃがいも(馬鈴薯)の選別作業



夕食・白石さん家族と団らん

糸川先生が日頃思っていることから農家の1日の仕事や農業のことまで熱論！
様々な話題で盛り上がり、団らは夜中まで続きました。



選別のコツや
作物の流通の
仕組みなどを
聞きながらの
選別作業は真
剣！

2日目

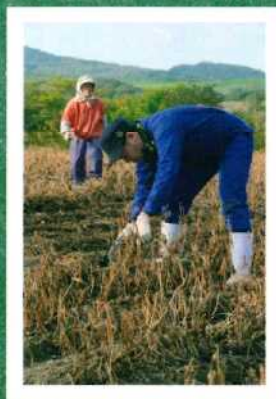
起床・朝食



小豆畑の端刈り
じゃがいも(馬鈴薯)の選別



昼食・体験終了



「端刈り」
トラクターを畑に入れる通路
を開けるため、手鎌を使って畑
の周囲刈り取っていく作業。

白石さんは「サクッ、サクッ」と
軽快に刈っていきますが、糸川
先生の刈る音はなぜか「ブ
チッ！ブチッ！…」



農と学び

地域との絆を深めた2日間

北海道農協青年部協議会(JA道青協)が実施した学校教員を対象とした農村ホームステイ「食の大切さを伝えるプロジェクト」。

教員が生産者宅に泊まり込んで農作業などを体験し、生産者家族とのふれあいを持つこのプロジェクト。参加した教員はこの体験で何を感じられ、そしてどのように子どもたちに感じられたことを伝えたのか。日高・胆振地区で実際にホームステイを体験された洞爺湖町立虻田小学校の糸川大輔教諭の事例を紹介します。

糸川先生は参加者募集を聞いて、真っ先に手を挙げたといいます。「私が担任をしている3年生は自分の町や地域の産業について学ぶ学年なんです。赴任して4年目ですが、私自身この地域の農業について中々知る機会がありませんでした。だからいい機会だと思いました」。やる気満々で臨んだ糸川先生。受入農家の白石さん宅に着くなり、携帯電話の電源を切る集中ぶりでした。

受入農家の白石圭吾さんはJAとうや湖青年部部長。両親と3人で馬鈴薯や小豆、かぼちゃ、長いもなどを約28ヘクタールの農地で生産しています。畑の北に羊蹄山の秀麗な姿を望む雄大な景色に、思わず見とれる糸川先生。

最初のお手伝いは資材の積み下ろし。「農家にはいろいろな仕事があります。普段の作業や生活を体験してもらうことが趣旨なので特別な

作業メニューは用意していません。従業員として一緒にやってもらいます」と白石さん。糸川先生も「力仕事は望むところ」と元氣いっぱいです。

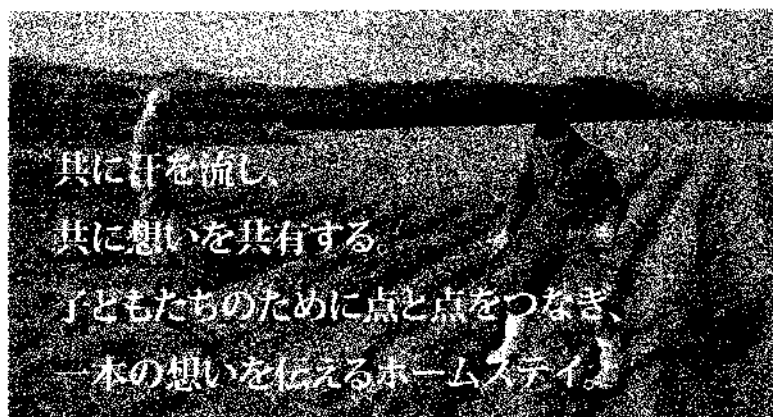
次は馬鈴薯の選別作業。白石さんのご両親とともに選別機の横に立ち、流れてくる馬鈴薯の中から、表面が緑色になったり傷があるなど出荷できないものを取り除きます。糸川先生は、選別のコツや作物の流通の仕組みなど様々なことを質問しつつ、馬鈴薯に目を凝らし、手を動かしていきます。午後3時ごろに短い休憩をはさんだ以外、約5時間立ち通し。真新しい作業用つなぎや長靴が少し汚れて作業着らしくなってきたところでこの日の作業は終了。作業場から出ると、すでに日はどっぴりと暮れていました。

白石さんの奥さん手作りの夕食で、食卓を囲んでの団欒のひとつき。

「慣れない仕事で疲れたでしょ」との
 ねぎらいの言葉に、「野菜の中でも
 じゃがいもが好きなんです。ますま
 す愛着がわきました」と糸川先生。
 「畑の広さ、景色、機械、生産する作
 物の量、すべてスケールが大きくて
 驚きました。馬鈴薯はほんのちよっ
 との傷でも取り除いてしまう。消費
 者に届ける食べ物に対する厳しさとい
 うか、食を預かるというのはこう
 いうことなんですね」と感慨深げ。
 白石さんは「作物がどうやってでき
 るか、先生が分かっていると畑を見
 て子どもたちに説明できる。教える
 ことは先生の得意分野というか本
 職ですからね。農業に興味を持つ子
 どもたちがもっと増えてくれるとう
 れしい」とくつろいだ表情で話しま
 す。

日胆（口高・胆振）地区農協青年
 部協議会の増田和博会長も団樂の
 輪に加わりました。「先生には長く

子どもたちに伝えていってほしい。
 地区には口のJAがあり、来年から
 実施できるところがもっと増えて
 いくてくれれば」と熱く語ります。こ
 の夜は遅くまで語り合い、糸川先生
 が口ごろ思っていることから農家の
 一日の仕事や農業のことまで様々な



共に汗を流し、
 共に想いを共有する。
 子どもたちのために点と点をつなぎ、
 一本の想いを伝えるホームステイ。

話題に花を咲かせ、寝床に就いたの
 は口付が変わるころだったといいま
 す。

翌日は、約4ヘクタールの小豆畑
 の端刈りと、昨日に続いた馬鈴薯
 の選別作業です。端刈りとは、トラ
 クターを畑に入れる通路を開ける
 ために手鎌を使って畑の周囲を幅
 4mほど刈り取り、ひと抱えほどの
 大きさに束ねて土の上に立てていく
 作業です。腰も膝も曲げての作業姿
 勢はつらく、風に飛ばされない立
 方を何度も教えてもらいますが、な

かなかうまくいきません。ようやく
 終わり、「あれをずっとやっていたら
 （体が）すごいことになっていたと思
 います」とほっと一息。

その後、馬鈴薯の選別を2時間。
 昼の食卓を家族全員で囲んで今回
 の体験を終りました。

糸川先生は「こういう仕事の一つ
 つ積み重なって私たちが食べるも
 のができているんですね。僕は2日

間だけ体験させてもらいましたが、
 生産者の方たちは一年中。大変な仕
 事だと本当に思いました」。言葉に
 実感がこもります。そして「できるだ
 け洞爺湖町の野菜を食べるように
 します。農業のことで分からないこ
 とがあつたら聞ける相手ができまし
 た。このホームステイで地域との絆
 ができた気がします。」と、今回の出
 会いを喜びます。

白石さんは「子どもたちに伝わる
 ことが今まで以上にあるとうれし
 い。自分たちにとってもこうして異
 業種で交流できるのは視野が広が
 るし、刺激にもなりました」。

異なる職種が触れ合った2日間
 は新たな出会いの機会となったよう
 です。

身を持って体験した「本当の農業」 糸川先生が児童へ伝えたメッセージ



農と学び

食の大切さを伝える授業

洞爺湖町立虻田小学校での実践事例



観光と農業が盛んな人口約9,000人の自治体。
虻田小学校は明治17年開校。

農村ホームステイを終えた虻田小学校の糸川先生。「この体験を学級の子どもたちに伝えたい」と思うようになりました。

そして思いついたのは、学校で新聞作りを経験したばかりの児童たちに向けた「壁新聞」作り。社会科の学習と関連づけて体験を材料に授業を行いました。

クイズ形式を取り入れて行った授業での子どもたちの反応は想像以上。「えっ！そうなの？」という声が教室中に響きわたりました。

この日は受入農家の白石さんたちも授業に飛び入り参加。授業の最後では子どもたちから農業のこと、野菜の

ことなどたくさんの質問が飛び交いました。農家さんの生の答えには教科書やパソコンでは調べられないような驚きがいくつもあり、授業はより一層盛り上がりました。

授業後の子どもたちからは「先生がやったことを教えてくれたから、いつもより興味が湧いた」「僕も先生と一緒に農作業をやってみたいと思った」といった声が寄せられました。

「この町は子どもたち全員にとって『ふるさと』。その『ふるさと』をいつまでも愛する大人になつてほしいと思いました」と教員としての想いを語る糸川先生。「農村ホームステイで私が体験したことを子どもたちにも体験させる機会を作ることができれば、もっと学習の幅が広がるのではないかと思います」と今回の一連の経験を振り返りました。

ゴロゴロ...じゃがいもの大じゅったい!!

それぞれの役割って？



- ① 白い皮に入っているじゃがいもは、お弁当やお味噌汁の具に使う。
- ② 向かって右側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。
- ③ 向かって左側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。
- ④ 向かって右側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。
- ⑤ 向かって左側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。
- ⑥ 向かって右側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。
- ⑦ 向かって左側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。
- ⑧ 向かって右側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。
- ⑨ 向かって左側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。
- ⑩ 向かって右側のじゃがいもは、お味噌汁の具に使う。

みんな協力

① 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。② 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。③ 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。④ 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。⑤ 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。⑥ 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。⑦ 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。⑧ 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。⑨ 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。⑩ 目の作業は、畑の土を掘り、じゃがいもの種を植える。

洞爺湖

TOYAKO

ほんもののうか新聞2

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

発行所 洞爺湖町立洞爺湖小学校

発行日 2014年10月28日(水)

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

じゃがいもの大じゅったい!!

「ほんもののうか新聞」

今回の農村ホームステイの経験を子どもたちに伝える手段として糸川先生が選んだのが『新聞』。

「壁新聞だけでは書きたいことが収まらず、個人に配る新聞も作りました」

平成26年度 『新規採用栄養教諭研修』でも受け入れ



農家がいつも消費者のことを考えて生産していることを伝えたい。給食も同様、食物を作る人と、食べる人とをきちんとつなげなければいけないと思いました。



栄養士として、食材ができる所や作る農家の話を実際に直接聞くことができ、貴重なことだと思いました。とても勉強になりました。



平成26年度は北海道教育委員会の新規採用栄養教諭研修にも農村ホームステイが組み込まれました。

平成26年8月、深川市で空知地区の青年部員6名が、平成26年度新規に着任された全道の14名の栄養教諭を受け入れました。

農と学びの連携を考えるフォーラム 2015

平成27年2月28日、北海道農協青年部協議会は北海道教育委員会の後援を受け、「農と学びの連携を考えるフォーラム2015」を札幌で開催しました。

文部科学省の三谷卓也室長や北海道教育庁の山際昌枝指導主事、教員を受け入れた北海道農協青年部協議会、虻田小学校の糸川大輔教諭をはじめとする実際に体験した教員が農村ホームステイの実践事例や学校での授業導入事例の紹介等を行いました。

特別講演には女優・南沢奈央さんがゲストとして登場。パネルディスカッションでは農村ホームステイに馳せる想いや農と学びの将来像などについて熱く語り合い、農村ホームステイの価値とその意義を再確認しました。



文部科学省食育担当の三谷卓也室長による農村ホームステイに関する講評



ホームステイ体験と学校への導入事例について紹介する虻田小学校・糸川大輔教諭



パネルディスカッションは北海道農政部・桑名真人課長の進行で実施されました

日時：平成27年2月28日（土） 13:00～16:30

場所：ホテルモントレエーデルホフ札幌

主催：北海道農協青年部協議会

共催：農業・農村ふれあいネットワーク

後援：北海道教育委員会

パネリスト

小林国之氏（北海道大学大学院助教）

南沢奈央氏（女優）

糸川大輔氏（洞爺湖町立虻田小学校教諭）

齊藤和弘氏（北海道農協青年部協議会会長）

近江正隆氏（JA道青協農村ホームステイアドバイザー）

ムステイ

結びつける本物の体験。

泊を伴う家族団らん。
を開き、今後の生き方を
なせる貴重な体験です。

童生徒たちが体験した
の事例を紹介します。

農村ホー

食と人、そして人と人を

ありのままの農作業、
食に対する新たな世界
見つめるきっかけを

次のページからは、児
農村ホームステイの

児童生徒のための 農村ホームステイ

—農家宅でのありのままの泊を伴う生活体験—

心と体で感じるホンモノ体験

「人前でしゃべれない消極的な子どもがどうして一晩で変わったのか？」これは農村ホームステイ（農山漁村生活体験）に生徒を送り出した学校の先生の感想。農村部には子どもたちにとって大事な学びの場があり、子どもたちが「生きる」を感じるそんな「スイッチ」が入る場所でもあります。

農家宅でのありのままの生活を体験する泊を伴った「農村ホームステイ」ではそんな学びを子どもたちに提供しています。そしてどんなに科学が発展してもどんなに進歩しても、いのちの糧「食」がなければ、人は生きていけません。農村ホームステイは、その大事な役割を担っている道内各地の農村の価値と役割を子どもたちに伝える機会にもなっています。都市在住の子どもたちには農村をより自分事として感じるきっかけにもなり、農村部に住む子どもたちには、誇るべき故郷という思いを育む機会にもなります。

農村部の児童・生徒たち
(事例その②/ 浦幌町立小学校)

都市部の児童・生徒たち
(事例その①/ 大阪府立高校)

農村ホームステイ

地域の価値を感じ、育む社会規範

地域の良さ・魅力を再発見するとともに農業の大切さと産地に暮らすことへの誇りを実感する機会となり、また地域の農業者とふれあう中で「礼儀やあいさつ」の必要性や地域の人たちの温かさを感じています。

身近に感じ、愛着を育むきっかけに

体験を通じて「農業」「農村」「農家」という言葉が身近な存在に。農業者との家族のようなふれあいから農村の第二の故郷として感じ、家族のような繋がりは都市部の子どもたちにとって大きな財産になっています。

いつも食べている野菜が
大変な苦勞で作られて
いることがわかりました。
今まで以上に食べ物
を大切にしようと思いま
した。



すごく優しく接してくれて
うれしかったです。お
母さんと一緒に作った
ご飯の味は忘れませ
ん！



ホームステイで農家の
大変さを学び、事後
学習で生きることの大
切さを学びました。



農村ホームステイを体験した

児 童 生 徒 か ら の 感 想



食べ物を作る人がいな
いと自分たちは生きて
いけない。当たり前の
ことに気づかされまし
た。

農業関係の大学に進学したい
と思いました。ホームステイが
できて良かった。



搾乳体験がとても新鮮でした。
帰りたくなるくらい、すごく楽
しい一日を過ごせました。

事例その① 大阪府立高校

都会の高校生が農村体験



田植え体験

新しい発見と感動！



草取り体験



みんなで食事

稲作・畑作・酪農・畜産など多種多様な農業の現場での体験は、大都会大阪に住む高校生には生まれて初めてのことばかり。また家族のようなふれあいにたくさんの感動のドラマが生まれています。（写真は上川管内での体験の様子）

●市岡高校 山中一郎先生

そのままの自分を無条件で受け入れてくれる大人たちがいること、農家さんたちの素朴な人柄、温かい家族の雰囲気が生徒たちの心身をとくして開放してくれたように思います。受入家庭との別れ際の生徒たちの涙がすべてを物語っていました。

●香里丘高校 十河渚先生

食べ物の大切さや命の大切さについてしっかり考えることができています。今までも家庭科の授業の中でそういったことは教えているつもりだったのですが、やはり農家さんと色々な体験をしたことが更にいい影響を与えてくれたのではないかと思います。



ホームステイ後の学校での学習

現在、ホームステイ後の学校での学習が幅広く展開されています。その内容は体験の振り返りから食育・キャリア教育などへの応用となっています。



STEP 1 農村ホームステイ

体験により生まれる
つながり

農村での家族のようなふれあい、様々な体験から農山漁村がより身近な存在に。

STEP 2 事後学習

振り返り考えることで
深まる学び

生徒みんなで体験を振り返り、農山漁村の役割・食の大切さを再考。生きること・社会との関わりを学んでいきます。

その先に…

育まれる新たな力

体系的な「実体験＋学び」からの気づきは、確実に社会を生き抜き、次代へつなぐための力を育んでいきます。

事例その②ー浦幌町立小学校

身近な場所で新しい発見

農業が基幹産業の浦幌町。町内の農家宅でのホームステイが、町の良さ・食や農業の大切さを再認識させる機会となっています。また共同生活から思いやりや豊かな人間性を育むきっかけになっています。



ほ乳体験



晩ご飯作り



収穫体験

●浦幌小学校 中村吉昭校長

「地域総ぐるみで生きる力を育む」が浦幌町の教育方針です。この町内すべての小学5年生に実施している農林漁業者宅でのホームステイは地域の将来を担う人材の育成に大変効果的だと感じています。そして地域の生産者の方の協力なしには実施できない事業です。

●浦幌小学校 笹川尚哉先生

滞在時間は1泊足らずと短いのですが、子供たちが農家さん宅でリアルな体験をしたからこそ得ることができた「想い」のこもった気持ち、心の変容に毎年驚かされています。また教員自身も「農村ホームステイ」をする必要性も合わせて感じているところです。



ホームステイ後の学校での学習

食育を視野に調理実習・給食指導を栄養教諭と連携し実施。ホームステイで身近になった農家の思いにどんな行動で応えていけるのかを考えました。



message

北海道農協青年部協議会では、これまで多くの関係機関と連携しながら「食」や「農業」の大切さを伝えるため、食農教育活動の実践に取り組んでまいりました。平成25年度からは、更なる食農教育活動の推進を図ろうと、学校教員の方と連携を行うことで「食」の大切さはもとより「命」の尊さ、「いただきます」が持つ言葉の意味などを、先生の立場から子どもたちに、体験を通した言葉で伝えていただきたいとの想いで「食の大切さを伝えるプロジェクト」と題し、先生を対象としたありのままの農村体験事業「農村ホームステイ」を展開してまいりました。参加された先生や各方面からも好評をいただき、少しずつではありますが本事業に対する手ごたえを感じているところです。

このパンフレットでは、「農と学びの連携」をテーマに北海道農協青年部が行ってきた「教員を対象とした農村ホームステイ」の取り組み内容の紹介や、実際に参加された教員の方からの授業への活用事例等を紹介いたしました。ぜひ多くの学校教員の方々が農村ホームステイを体験していただけたら、うれしく思います。そしてこの農村ホームステイを通じて育まれた教員と地域住民である農業者との絆の輪が広がることを期待いたします。

私も三人の子どもを持つ親として、この農村ホームステイ事業で様々な先生と会話をしていく中で、教育とは学校だけが行うものではなく、家庭や地域がそれぞれの役割の中で学校と協働しながら子どもたちの成長を育んでいくことが大事だと感じました。引き続き、私たち JA 青年部が子どもたちの心の豊かさを育むためにできることを模索してまいりたいと考えております。

～教員の皆様へ～

北海道農協青年部協議会
会長 齊藤和弘



道内の小学校・中学校・高校の先生方へ

農村ホームステイを 体験してみませんか？

27年度も全道で農村ホームステイ～先生編～を実施します

【詳細については以下にお問い合わせ下さい】

「食の大切さを伝えるプロジェクト2015」

・農村ホームステイ事務局 (株)ノースプロダクション

電話：015-576-4678 FAX：015-576-3772 Email：kikaku@north-production.co.jp

・北海道農協青年部協議会事務局 (JA北海道中央会 地域振興課内)

電話：011-232-6417 FAX：011-222-3598

Email：doseikyo@chuo.ja-hokkaido.gr.jp

URL：<http://jayouth-hokkaido.jp/> (下記のQRコードがご利用いただけます)





食料基地北海道から 未来にむけて

食料基地北海道から未来にむけて
いのちの糧「食」を生み出す農村。
そこは「生きる」を心と体で感じ
地域や社会との繋がりや大切さを
学ぶことができる大事な場所です。

制作・発行 農業・農村ふれあいネットワーク事務局
札幌市中央区北4条西1丁目 JA北海道中央会農業振興部地域振興課内
電話：011-232-6417

平成27年3月発行